

---

# 孫呉ルート

眼鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孫呉ルート

### 【Nコード】

N1681BA

### 【作者名】

眼鏡

### 【あらすじ】

冥琳と雪蓮の幸福。

太史慈と孫瑜の友情かな。

## 輪廻転生

この世界に生まれ変わって数週間ほど、今日も良い天気だ。

俺を産んでくれた母上殿は黒髪ポニテで色白美人だ。とても優しい、ただ後年この考えは覆される。そんな母上殿に色々とお世話になり、羞恥プレイにも幾分か慣れた。

最初は訳が分からなかったが考える時間は山程ある、と言うか今は考える事しか出来ない、そして身動き出来ない事は想像以上に不便だ。

前世の記憶と知識は、臍げに、何と無く、曖昧に、覚えている。多く考える事は何故転生したか、運が良いのか悪いのか偶然か運命か、とりあえず哲学って難しい。

光陰矢の如し、十二になった。武術弓術剣術気など色々な事を仙人みたいな爺から学んでいる。この爺はド偉く強い、いつもボコボコにされて修業が終わる。

漢文は少し違和感があったが、直ぐに読めるようになった。算術は楽々出来る、多分だが前世で理系だったんだろう。

そして解った事が一つある、最初は別世界だと考えていたが違ったらしい、歴史は苦手だが孫堅とか黄巾とか聞けば流石に此処が三国志の世界だと言うのが分かった。ただ三国志を詳しく知らないので、

大きな戦や有名武将しか分らない。  
後は優しい義父が出来た、母上殿にはもったない程の人物だ。

またまた光陰矢の如し、十七になり、爺にも勝ち越す事が出来るようになった。母上殿や義父から学問を多く学んだ。そして三年前に義弟が出来たが、これがトロけるように可愛くてプニプニだ。

ちなみに俺の名は、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は誠だ。

うららかな昼下がりに俺は母上殿に呼び出されて、聞いた第一声が「お前さ暇だろ、だから上奏文じょうそうぶんを持つてる青州の使者をどうにかしてこい」である。

もう少し解りやすく最初から説明してくれと母上にお問い合わせした。簡単に言うと『青州（敵）と東萊郡（俺達）の間で訴訟になり上奏文を先に報告した方が勝ち』らしい、で青州の奴らの邪魔もしくは上奏文をどうにかしろと言う。あの糞ば：失礼、母上が言うには子が親の仕事を手伝うのは当たり前なんだそうで、まあ俺は面白そうだから良いかなと思いき馬を走らせて洛陽に向かった。

そして上奏文の検閲所に到着してみると、そこには青州の使者が既に居て順番を待っている所だった。あまり良い方法が思いつかな、まあ、なるようになるかと思いいながら青州の役人に声をかけた。

「上奏文を出す前に間違いが無いか確認をするので見せてください」

「わかりました、お願いします」

悪いな、と心で謝り一気に上奏文を破り捨てた、そんな時の青州役人達の顔はポカ〜ンとしていて不覚にも少し笑いそうになった。

「なっ、なんて事をするんだあ」

「まあまあ、落ち着けよ。俺もアンタ達もこのままでは処罰される、だから一緒に逃げようやあ」

そして俺達は遼東郡へ逃げ出した。

遼東郡に到着して元青州役人達と別れ告げて、これからの事を考えた。上奏文を破いたし青州の人達には怨まれるだろうな、もう青州には行けない。

あの母は心配するだけ無駄だが、ただ心優しい義父と可愛い義弟は心配だ。

とうぶん帰れそうにないから仕事でも探すかな。

まあ、とりあえず小籠包でも食うかなあ。

金石之交（前書き）

金石之交

きんせきのまじわり

意味

いつまでも変わらない友情。

## 金石之交

久しぶりに家に帰るかなあ、半年たったし大丈夫だろう。そんな感じで東萊郡を目指し、遼東郡から出発した。

晴れ渡る空、生い茂る緑、そして馬鹿で間抜けな賊共。賊Aや賊Bが騒いでいる、まったく五月蠅い奴らだ。弱い奴には興味無いんだよなあ、疲れるだけだから。

「今すぐ決めてくれ、死ぬか逃げるか、どっちが良い」  
俺が、そう言うのと。

賊Eの掛け声の元。

「馬鹿かお前、野郎共やつちまえ」  
馬鹿な賊共は俺に襲い掛かって来た、助かる命を無駄にするなんて本当に救えない。

五人目の賊を切り捨てて一息ついた時に、丁寧な口調で声が聞こえてきた。

「手助け、いりませんでしたね」  
振り返って見ると赤毛赤目で日に焼けた爽やかな笑顔の好青年が、そこには居た。

「都昌にある書や竹簡を読みたくて、向かっている所です」  
成る程な、今も手に本を持ってるしな。

「へえ、書を読む為に都昌まで行くのか、途中の東萊郡に俺の家があった竹簡なら結構あるし書も少しならあるけど、来てみるか」

眼を輝かせ即答で。

「それは是非とも行きたいですね、どんな書や竹簡があるんですか」  
本に関する食いつきは、ハンパなかった。  
そんな感じで書物の話をしながら日が沈んだ。

真つ暗闇で、たき火の炎しかない山の中、空を見上げると木々の間から馬鹿みたいに綺麗な星が輝いているのが見えた。

「星が好きなのですか」

阿呆みたいにずっと見ていたからか、そんな事を聞かれた。

「好きか嫌いかで言えば、好きなのかねえ、でも正直に言えばこれ  
といって好きなモノが無いな、そうゆうモノあるか」

俺がそう聞くと、少し微笑んで、優しく、強く、はっきりと、答えた。

「ありますよ、どんな事をしても欲しい者、たった一つだけ欲しい  
者が」

俺は少しばかり面食らったと思う、さっきまでの優しいノンビリし  
た眼では無く、熱く燃えるような瞳だった。

「女か」

俺が聞くと、じつと俺の目を見て答えた。

「はい、そうですよ」

真つ直ぐな男だなあ。

「アンタ程の男にそこまで想われていたら落ちない女なんていない  
だろ」

困ったような苦笑いをして、少しためらってから話し出した。

「弟のように思われているんです、それに…、従姉妹なんですよ…。  
軽蔑しますか」

この時代はイトコ婚って駄目なんだっけ、少し逡巡してから。「軽蔑しねえよ。まあ、良いんじゃないか、確か武帝も従姉妹と結婚しただろ」

そう言うと、少し驚いたような顔をした後、真剣な表情でゆっくりと話した。

「でも建前上は駄目でしょう、それに外聞も悪いのは事実です。でも絶対に手に入れます、絶対に」

最後は爛々と瞳を輝かせて、そう言い切った。

自然と心から言葉が出てきた。「面白い男だな」と。

俺が、そう言うと直ぐさま切り返してきて。

「そうですね、貴方も十分に面白い男だと想いますが。それと名乗り忘れていました、姓は孫、名は瑜、字は仲異、真名は牙連と申します」

流るる石の如く一気にさらりと言い切った。俺はその時、相当な間抜け面をしていたと思う。

この世界では、本人の許しもなく真名を読んだら殺されても文句を言えない。それぐらい大事なモノののほほなのに。

そして、またまた素直に言葉が出てきてしまった。

「何故、真名まで許したてくれたんだ」

にっこりと笑って、

「勘です」

自信満々に牙連は言い切った。

ひとしきり笑ってから。

「俺も名乗ろう、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は誠だ」

牙連は、びつくりした顔をして、ナチュラルに俺の真名を呼びながら話し出した。

「誠が、あの太史慈子義だったんですか、凄く有名になってますよ。堂々と検閲所に乗り込んで役人全員を倒し、瞬くまに上奏文を破り捨て消えて行ったって」

へえ、そんな噂になってたのか、知らなかったな。

まあ、知らないオッサンやオバサン、爺さん婆さんが声を掛けてきたり食べ物くれたが、そうゆう事だったのか。

なんだかんだで話し過ぎて遅くなり、もう寝る事にした。

おやすみなさい。

## 帰路感慨（前書き）

適当に繋げた言葉です。

## 帰路感慨

あれからは何事も無く、昼頃には東萊郡に着いた。久しぶりに我が家を見ると、なんだか感慨深いなあ。

家に帰ると誰もいなかった…。とりあえず牙連を書齋に案内して居間に戻って茶をいれていると、

「ただいま、誰か居るか」

そんな声を掛けながら母上殿が家に入ってきた。

俺は納得出来ない気持ちで、渋々ながら出迎えの言葉を口にした。

「お帰り」

そして、この切り返しだ。

「ん、調度いい時に帰ってきたな。お前さ都昌に孔融という人物が居るからよ、その人が黄巾賊に襲われてるんだ。助けに行ってい」

半年ぶりに帰ってきた息子に、これだよ。

「なんで…、つか詳しくお願いします、わからないから」

この愚息は、とため息をこぼして話し始めた。

「若い時に助けてもらってな、その時の恩がある。知っての通り私は右足が無い、戦は少し厳しい。だから息子であるお前が行け、出来るだろ。」

母上殿は若い時に戦で怪我をして右足をなくした。ちなみに、その時の医者が俺の父親で、俺が三つの頃に亡くなった。

義父と義弟が帰ってきたので、俺は直ぐに義弟と遊ぶ事を決めた。

久しぶりに見る義弟はやんごとなく可愛いく、とても癒されながら戯れた。幸福だ。

義弟と遊び終わり、俺は書齋に向かった。そこには、ほぼ最初と変わらない姿のまま牙連が居て、違っていたのは本だけだった。

「どうだ良い書はあつたか」

牙連は眼を輝かして。

「医学書が多いね。他にも見た事ない書があつて凄く面白いよ。」  
「死んだ父親が医者だったからな。まあ、それは良かった」

とりあえず俺は母上殿と話した内容を解りやすく牙連に話した。

「と言う事なんだ。都昌には黄巾賊が居るから今は行かない方がいい。俺は明日にでも出発するが、牙連は好きなだけ、ゆっくりしていってくれ。」

牙連は首を振って、

「僕も行くよ。元々、都昌に行く予定だったからね。」  
笑顔で、そう言った。

「そうか、ありがとう。なら手合わせしないか」

強い事は分かるが、力量を出来るだけ知っておいた方がいいだろう。命を預ける事もあるだろうしな。

牙連も頷いてくれた。

キンツ、ガンツ、ガキンツ、俺達は剣劇の音を鳴らしながら戦っていた。牙連は想像以上に強い、苛烈で豪快で鮮やかだった。そして俺は闘いが楽しいと感じていた、だんだんボルテージが上がってきていて本気を出してやるうかと思つた、調度そんな時に牙連は距離をとって。

「これぐらいで、いいでしょう。これ以上やると大変な事になるので、終わりです」

確かに、とも思いつながら俺は残念でしょうがなかった。

ふう、少し頭でも冷やすか。

「大変な事になる」その時の俺は、その言葉の意味を勘違いしていた。

東奔西走（前書き）

コノ盃ヲ受ケテクレ

ドウゾナミナミ灌ガセテオクレ

花ニ嵐ノタトエモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ。

井伏鱒二「勸酒」

（「厄除け詩集」筑摩書房刊）

## 東奔西走

東萊郡を朝早くに出発して、日が沈む前には都昌近郊に着いた。

都昌、近くの茂みの中に俺達は隠れていた。

「黄巾賊が、なかなか多いな。入り込むのが厳しいねえ」

「でも、まだ完全には囲まれていないから、夜を待って都昌に入れればいいよ。それにしても誠の母上は、少し無茶を言うね。」

「素直に言ってくれていいぞ、無茶苦茶だって。俺は、もう慣れたけどな」

自分で言って悲しくなった。

夜の帳が降りて、数時間後。

「さ〜て、そろそろ行くかあ」「うん、行こうか」

暗闇の中を移動して、都昌と黄巾、両方に気付かれる事なく、すんなりと城壁の下まで、たどり着いた。

俺は腰に差していた蛇腹刀を抜いた。

「それで、任せろって言ってたけど、どうするんだい」

「まあ、見てろよ」

この蛇腹刀、母上殿が言うには家に代々伝わる刀らしい、始めて見た時には「蛇尾丸」だ、と分からない単語が浮かんできたが、あまり気にしていない。

この蛇腹刀を俺は使いこなせていない、操る事が難しく、いつもは「突起の付いた刀」として使っている。

大きく後ろに振りかぶり、俺は祈りながら刃を伸ばした。運よく良い具合に引っ掛かったようで、安心した。繋ぎ目と峰の部分を掴み足場にして、城壁を登って行った。

「あの刀、本当に伸びるんだね。今度、詳しく見せてよ。」  
縄に縛られ武器を取り上げられて、こんな状況で呑気だなあ、と俺は感心していた。

何故こうなったかと言うと、牙連が城壁を登り終える所で調度、見回りの兵士が来て、俺達はおとなしく捕まる事にした。

幸いに、あの元青州役人が居て本人だと証明してくれて、直ぐに縄を解いて武器を返してくれた。

ちなみに孔融のオッサンは、あの孔子の子孫らしい。

それで孔融のオッサンに作戦とか有るのかと聞いてみたが援軍が来るまで籠城すると言う。

ただ、どこから援軍が来るのか曖昧で本当に来るか心配だ。

今ならば、まだ黄巾賊を潰せると思うが打って出る気は無いようだし、兵を貸してくれば俺がやるが、まず貸してくれないだろう。

黄巾賊も攻めあぐんでいるが、このままでは、じり貧になって終わる。

「早くどうにかしないと、黄巾賊が集まってきて完全に包囲されるね」

牙連も俺と同じ考えらしい。

どうしたもんかと二人で考えていたが、刻々と夜が更けていった。

あれから四日後、黄巾賊に激しく攻められている。完全に都昌は包囲されて、都昌の兵力だけでは到底覆せないようになっていた。そして孔融のオッサンは、ようやく重たい腰をあげて、平原に居る劉備に援軍要請の使者を出す事にしたようだ。

俺は胸中で思い切り叫んでいた「今更かよ」「つか使者を出してなかったのか」

いや気付かないでいた俺が悪いな。すんだ事は、しょうがない。冷静になって落ち着こう。

完璧に包囲されている中、わざわざ使者になろうとする奴がいるわけもなく、他の奴らに任せるのは不安過ぎて俺は自分で引き受ける事にした。

「真っ直ぐ突っ込んで行かないよね」

牙連よ、お前は俺を殺したいのか。

「死ぬわ、なんで牙連の中で俺は猪突猛進な人になってんだよ、一応は考えがある」

「誠が知り合いに似ていてね。考えがあるなら良かった、僕も手伝うよ」

とりあえず牙連に作戦を話して、意見を聞いてみた。

翌日。

作戦一日目。

俺は弓矢を持って、兵士三人には的を持ってもらい、朝早くに門を開け城外に出た。

黄巾賊は、それを見て攻めて来ようとしたが。

城門の前で、さっさと三射を射って直ぐに戻った。

作戦二日目。

昨日と同じく、三射を射って直ぐに戻る。黄巾賊の中には、少し動く者もいるが、またかと興味が薄くなっている。

作戦三日目。

黄巾賊は、ほとんど興味を示していないようだ。

牙連が三射を射ったの確認して、俺は馬を一気に走らせて一騎で城門から飛び出した。

黄巾賊は、最初ポカ〜ンとしていたが慌て追いかけてきた。

追って来た賊三人を三射して仕留めたら、誰も追ってこなくなった。意外と上手く行くもんだな。

「劉備玄德殿、お初にお目にかかる。我が名は、太史慈子義。都昌が黄巾賊に襲われている。出来れば今直ぐに三千ほど兵を貸して頂きたい。」

自分で自分の冷静さを褒めてやりたい、だって劉備、カンウ、チヨウヒ、が女なんだよ。

びっくりした、びっくりし過ぎて馬鹿みたいに丁寧口調で喋ってしまった。

男が一人居たが、なんか違和感がある名前だった。

少し相談をしてから、快く貸してくれた。武将二人も着いてきてくれるようだ。

三千の兵を引き連れて平原を出発し都昌を目指した。

黄巾賊は、無駄に足掻く事もなく直ぐさま逃げ出した。挟撃されるし、分が悪いからな。  
つまらんけど、見事な判断だ。

それから何故か劉備軍の一刀と言う男に勧誘されたが断った。誰かに仕えるなんて考えた事がなかった。

少し考え事をしていたら、向こうから牙連が歩いて来た。

「お帰り、一騎駆け。勇猛だったよ」

「ただいま。ありがとよ」

これで孔融のオツサンにも恩返し出来ただる。さつさと家に帰れるなど思っていたが、そうは問屋が卸さかった。無駄に活躍したせいか孔融のオツサンに気に入られて、宴会に付き合わせられた。少し飲み過ぎたなあ、酔いでも醒ますかあ。

城壁の階段を登ると既に牙連が月見酒をしていた。

俺達は、言葉を交わす事なく、ぼーっと夜空の月を見ていた。

その時の俺は、酒と月に酔っていたんだと思う。

ぼつりぼつりと話し始めた。転生の事、この世界の事、しばらくして話し終えて聞いてみた。

「信じるか」

「信じるよ」

そして今度は、牙連がぼつりぼつりと話し始めた。

「僕はね、誠。好きな人に害をなそうとした兄を殺したんだ。後悔はして無いと言えは嘘になるけど、やってよかったと思ってるよ」

「軽蔑、しました」

「軽蔑、しねえよ」

それっきり、俺達は、また黙り込んだ。

## 一騎打ち

あれから、二年がたった。

牙連と別れて一度家に戻り、あてもなく旅をして、久しぶりに家に戻ろうかと考えていた。

俺が飯屋を探していると、声を掛けてきた奴がいた。そいつは劉ヨウの使者で、劉ヨウが同郷のよしみで俺に会いたいと言っているらしい、確か劉ヨウは將軍の位だったかな、飯が出るだろうし、俺は会いに行く事にした。

間が悪かった。

劉ヨウに御目通りしている時に孫策軍が攻めて来た。

そして俺は劉ヨウ配下の人達に力を貸して欲しいと頼まれて、これも縁かと思ひ助力する事にした。

孫策伯符か「江東の麒麟」だったかな。面白くなりそうだ、いつちよ頑張りますか。

劉ヨウ軍は、どこぞ孫策軍にやられている。そんな中で俺は、斥候をしていた。

劉ヨウ陣営の中に人物鑑定家の許劭（よこしま）と言う人物が居て、その許劭に俺は嫌われているらしい、で劉ヨウは許劭の目を気にして俺を使わないようだ。

俺は一度しか許劭に会った事はないんだが、ほぼ無視、噂だけで嫌われているのかね。まったく、どうしようも無いな。

そして今日も今日とて、斥候をしている。

さっそうと馬を走らせて俺達六人は、適当な所で二人組になり三方向に別れた。

目新しい物は無いか、真面目に斥候の仕事をしていると少人数の間が向こうから来るのが見えた。

この時の俺は相当にフラストレーションが溜まっていたんだと思う。

得に考えもせず、一気に駆けて先頭に居る女に刃を向けた。

一合だけ切り結で直ぐに、強い、と思った。

そして俺は「一騎打ちしないか」その女に言い放っていた。

「いきなりね、でも良いわよ」先頭に居た桃髪褐色肌の女は了承してくれただが。

「雪蓮つ、何を言っている」

黒髪で眼鏡をかけた褐色肌の女は相当にお怒りのようだ。

どうにか桃髪女が黒髪女を説き伏せたようだった。

黒髪女が俺の事を睨んでいる。

桃髪女は、待ちに待った遠足に行ける、そんな笑顔をしながら「待たせたわね。あなた太史慈子義でしょ」と聞いてきた。

俺は「そうだけど」と答えた。

桃髪女は「やっぱりね」と、うんうんと頷いている。

「黒髪黒目で三白眼の八尺もある大きな男、聞いた通りね。私の事、聞いてない」  
うーん、誰だ、わからん。

銀髪褐色肌の弓を持った女の人が「名乗って、おらんじゃろうが」とヤジのような一声を言ってくれた。

「そうだったわね、ついすっかりしてたわ。我が名を名乗ろう姓は孫、名は策、字が伯符だ。牙連の従姉妹で江東の虎の娘よ、よろしくね」

ポカーンだよ、ポカーンとしていたよ。理解するまでに少し時間がかかった。

確かに孫だけどさ、孫策が従姉妹だったとは、どうしよ一騎打ち申し込んだよ、牙連に殺されるかも知れない。

そんな不安を感じとったのか。

「大丈夫よ、一騎打ちだもの私が死んでも、あなたが死んでも、恨みつこ無しよ、でも私を殺すのは無理でしょうね」そう言って剣を抜いた。

まあ、なるようになるか。

そんな感じで俺も刀を抜いた。数合を切り合うと楽しくなってきた、手加減なんて言葉は何処か遠くに行ってしまった。

お互い少しずつ傷をつくり、いったん距離をとった。

孫策は、頬の傷から出た血を指ですくい舐めると、すこぶる笑顔になった。怖いわ。

しばらくして鳴り響いていた剣戟の音が止んだ。それにもない俺

達二人の動きも止まった。俺の刀は孫策の首に、孫策の剣は俺の喉元に、動けず睨み合っていた。

そんな時に眼鏡女の声が聞こえてきた。「両者互角で良いだろう、お互い刃を引け」

孫策は距離を取り俺を指差しながら叫んだ。

「でも冥琳、こいつ牙連を男色にした変態よ、成敗しないと気がすまないわ」

ちよつと待て、なんだ、それ。

なんとか懇切丁寧に説明して、俺は誤解を解いた。

今日の所は、お互い引く事にして陣地に戻る事になった。

牙連の趣味がわからんな。あんな狂暴そうな女どこが良いんだ。

それはそれとして確か暗殺されるんだよな、牙連には伝えないとな。

## 防戦一方

あれから数日がたった。

孫策軍は押せ押せだが、劉ヨウ軍はボロボロだ。

劉ヨウは撤退する事にしたらしい。まあ、このままじゃ全滅するだろうしな。

しかし、まさかの此処で俺を丹楊の防戦を任せるとは、本当に無茶を言うなあ。

まあ、足掻けるだけ足掻くか。

そして俺達はゲリラ戦を開始する事にした。これなら俺の少ない部下で元山賊の者が多い部隊には調度良い戦法だった。

そんな感じで粘りながらも、徐々にでは有るが確実に戦線を押されていった。

そして、とうとう丹楊まで孫策の軍が押し寄せてきた。

いやあ、孫策軍が立ち並ぶ姿は壮観だねえ。さて、これから、どうするかなど、そんな事を考えていたら。

牙連が一騎で出て来て、大きな声で話し始めた。

「太史慈子義殿と一騎打ちにて決着をつけたい返答はいかに」

牙連は、やっぱり面白いな。

「少し話しをしてくる」

仲間達に、そう言って俺は城門から歩いて向かった。

牙連はニッコリしながら

「誠なら絶対、来ると思ってたよ。」

「馬鹿野郎、ただ俺は一騎打ちで俺が勝ったら孫策軍はどうするか、とりあえず聞きに来ただけだ」

また笑いながら

「僕に一任されたからね、誠が望むままに、して良いよ。ただ誠が負けたら僕達に協力して欲しい、良いかな」

「お前さつきから笑い過ぎだ。気前が良いね、そんなに俺に勝つ自信があるのか」

真剣な表情で

「あるよ」

短く一言だけ、言い放った。

「ならやるか」

少し距離を空けて俺達は向かい合い同時に刀を抜き、構えた。

行くぜ、その掛け声を発して俺は牙連に激突して行った。

数十合を切り合い、鏝ぜり合いをし、俺は飛びながら牙連の刀を避けた。

「軽業師みたいだ、ねっ」

「そうか、よっ」

切り結び、少し距離をとった。

行くぜ、心の中で呟きながら俺は蛇腹刀を伸ばした。

牙連は少しだけ驚いた顔をして直ぐに真剣な表情になった。

やるねえ、初見で大体の奴が終わるって言うのに、よっ。

「それ、伸ばせて鬪える、ように、なったんだね」

牙連は、蛇腹刀を、かわしながら、そう言った。

「人間、日々進歩するもんだろ」そう言ってやると、牙連が迫ってきて、

ゆっくり優しく話し始めた。

「誠…、本気を出すよ。死なないでね」

ゾクツとした感覚の後、俺は文字通り、数メートル、吹き飛ばされた。なんとか体勢を整えたが、その後は防戦一方だった。防ぐだけで手一杯だよ。

それでも数十合を持ちこたえた俺を褒めて欲しい。

そして俺の刀は宙をまっつて、地面に音をたてて落ち、牙連の刀は俺の首横で止まっていた。

「僕の勝ち、だね」

ニッコリ笑って聞いてきた。

「お前の勝ち、だよ」

俺は、そう言っつて大地に寝転んだ。

その後、俺は仲間全員を説得して孫策軍に入る事になった。おもだつた武将や軍師と顔合わせする事になり、その後、俺の処遇を決める事になった。眼鏡女、違った、周瑜公瑾は、俺を見て言い放つた。

「私は反対だ、孔融や劉ヨウを渡り歩いてきた男だぞ、信じられん。それに色々と問題もある、いくら牙連の友でも私は直ぐに納得は出来ない。」

これは軍師としての意見だ、と付け加えた。

孫策は短息しながら。

「わかったわ、冥琳。子義、武器を預かるからいいわね。それで冥琳が見張りをしなさい。」

子義は早く冥琳から信頼を勝ち取りなさい」

これ決定、はい終わり」と言いながら部屋を出て行った。

それに続いて武将や軍師も出て行き最後に牙連が、

「誠、冥琳にも今までの事を話せば分かってくれるからさ」

「冥琳もお手柔らかにね」

そう言ってから、扉を閉めた。

そして俺と周瑜だけになった。

椅子に座れ、と周瑜に言われ。俺はおとなしく椅子に座った。その後は尋問のような話し合いをして時たま、ふざけた事を言っていると凄惨な形相で睨まれた。

そう言えば周瑜は病気で死ぬだったな、牙連も真名で呼んでいたし大切なんだろうな助けないと、そんな事を考えていたら周瑜に怒られた。

それからも、じつくりと尋問されて、とても疲れた。

キツイ女だなあ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1681ba/>

---

孫呉ルート

2012年1月4日09時47分発行